



## エクアドルの、ある老後

「知財ぶりずむ」読者の皆さん、こんにちは。ワシントンDCの宮川です。この原稿の締め切りはちょうど日本の「敬老の日」になりなるとする頃です。ということで思い立ち、今回は「老後」について友人から聞いた話を書きます。

私が住んでいるのはワシントンDCですが、その中でも外れの方にある普通の住宅地で、ご近所さんというとないていが並みのアメリカ人になります。我が家の左隣りにはリタイア生活を始めてずいぶん経つ老夫婦が住んでおられます。彼らは、悠々自適といえますか、ビーチハウスに滞在するだの、海外旅行に行くだの、マイ・ヨットでクルーズに行くのだのでしょっちゅう家を空けています。

彼らがトルコに2年ほど行って留守になったことがありました。その間、彼らの知り合いであるアメリカ人の若夫婦がその家を借りて住むことになりました。その若夫婦のうちの奥さんの方がエクアドル系アメリカ人でした。彼らには、ちょうど我が家の長女と同年のお子さんがいましたので、我が家と彼ら一家はとても親しくなりました。今でも、ハロウィンの時にトリック・オア・トリートと一緒に出かけたり、サンクスギビングやクリスマスと一緒に過ごす会を持ったりとお付き合いを続けています。

その奥さんがこの夏休みの期間中に子供たちを連れて我が家に遊びに来ました。今年のクリスマス以来会っていなかったので話に花を咲かせていた時、ふと「そういえばご両親は最近どう？」という質問が自然に私の口から出ました。奥さんのご両親はエクアドルか

らアメリカに渡ってきた“移民”です。しっかり働き、しっかり子供を育て、数年前にリタイアされました。典型的な、成功した「アメリカ移民」といってよいでしょう。

そのご両親はエクアドル生まれの純粹エクアドル人ですから、故郷はエクアドルになります。彼らは望郷の念が強かったようで、老後はエクアドルで過ごすことに決め、アメリカで持っていた家売り、エクアドルへと引き上げていかれました。

そのご両親はどうしてる？エクアドルで楽しく老後を過ごしている？みたいなくらの意味で私は軽く奥さんに質問をしたのですが、それに答える形で彼女がしてくれた話に少なからず驚きました。

ご両親は首都キトで、最初のうちはのんびり暮らしていたそうです。アメリカでは夫婦共に良い仕事をしていたので年金がたくさん出ることもあり、物価の安いエクアドルでは経済的な不自由はまったくありません。

ところがそんな暇な生活を少し過ごした後、ムクムクと何かしたいという気持ちが生まれてきたのだそうです。お父さんは最初、今トレンド(!?)の3Dプリンターの輸入業をやろうとしました。3Dプリンターは、エクアドルの皆さんはせいぜい雑誌で見たことがあるくらいで、エクアドルには実質的に存在していないそうです。お父さんは「エクアドルで初めての3Dプリンター輸入業者になる！」と勢い込んで準備を始めました。

が、途中で挫折してしまいました。3Dプリンターをエクアドルに輸入しても使いたい人は現状ではほとんどいないことがわかった

からです。3Dプリンターどころか、一般的なパソコンを持っている人も相当に限られているのが現実です。

中南米ではどの国もそうかもしれませんが、パソコン関係の商品は全て輸入品です。関税が高いためパソコンも、その関連商品も高額となります。その結果、パソコンがある家はわずかだし、もしパソコンがあってもプリンターまでそろえる余裕がないのが普通だそうです。アメリカでは安いプリンターなら30ドルも出せば買えるのですが、エクアドルだと普通に1000ドル以上の価格になるのだそうで、3Dプリンターどころの騒ぎではありません。

お父さんは、エクアドル市場を捉えなおしました。そして、アメリカでは当たり前の…Eメールを書いたり印刷したり、インターネットをしたり、ということに対するサービスが、エクアドルでは需要に対して圧倒的に不足していることに気づいたのです。そこで、お母さんと相談して、家の近所に店舗スペースを借り、パソコン教室兼印刷業者兼ネットカフェという業態のお店を始めました。まるでインターネット創生期の日本のようですね。

両親から「パソコンの店を始めた」とスカイプで聞かされた娘(妻の友人である奥さん)は最初、"Oh, my God!" (なんてことしてくれるの!) と思ったそうです。これまで起業を一度もしたことのない両親が店舗商売を始めなんて、うまくいくわけじゃない! 「老後破産」への道まっしぐらよ! というわけです。

娘が抱いた不安は常識的には当然だったのですが、この店が実は好調なのだそうです。お母さんはアメリカで過ごした現役時代、仕事嫌いで、でも給料が良いので毎日愚痴りながら会社に出かけていたそうです。お母さんはそのおかげで高額の退職金と潤沢な年金を手にすることができたわけですが、今は

近所の人たちにパソコンを教えたりしながら夫婦一緒にお金を稼ぐのがとても楽しいそうです。

今後、そのお店の環境がどのように変化していくのかは誰にもわかりませんが、中南米の貧困や格差の問題が簡単に解決したり、パソコン類にかけられている関税が一気に下がったり、などはなかなか考えられません。ご両親の"mom & pop"ネットショップもかなり好調にやっつけそうです。

この話は、老後をどうやって生きていくか、ということ常々考えている私にとってなかなか面白かったです。一度リタイアしたものの、結局、生涯現役を貫かんとするお父さんの生き方や、人の役に立つことをしてお金を稼ぐのが楽しいというお母さんの生き方はとても清々しいものがあります。隣家を貸した側の老夫婦が、やれビーチハウスだ、海外旅行だ、クルーズだと、自由にきまままにフラフラと、ある意味アメリカ的な老後を過ごしているのと好対照です。私も将来起こるであろう現職からのリタイアに際してどうしようかなと、色々と想像を膨らませてしまいました。

## 筆者紹介

宮川良夫 (みやがわ よしお)

United GIPs代表、弁理士・米国パテントエージェント  
1956年 京都生まれ。1978年 同志社大学工学部卒業。  
1986年 弁理士登録、1997年 米国パテントエージェント登録。新樹グローバル・アイビー特許業務法人を初めとして、世界7カ国(地域)にて8箇所の特許事務所設立、経営に携わる。1995年以来、ワシントンDCに滞在し、現職場はUnited IP Counselors, LLC。趣味は、Rock Creek Parkを有効利用した犬の散歩と子(孫?)育て。好きな言葉は「天地不仁」。